

漢字教育実践の感想文

李 冬娜

二回の漢字教育実践を体験して、いろいろ考えさせられました。今まで、このように本格的に教壇に立って自分が作った教案に基づいて学生に教えた経験はまったくありません。実際にやってみてはじめて、思った通りにはいかず、問題点がたくさん出てきました。しかも、ほかの院生方の実践を見学して、教えられることが多いと実感しました。実践の時間がわずか30分しかないため、限られている時間でできるだけ豊かな知識をどのように学生に伝えればいいのか、かなりの工夫が必要です。

- ①授業前に、前もって学生の名簿を手に入れるとはるかに時間の節約になると思います。私の経験では、授業中、学生とやり取りするには、学生に答えてもらったり、前に書いてもらったりします。しかし、実際にすぐ返答できない場合がよくあります。学生が急に先生に当てられて緊張してしまって躊躇しながら、答えたり、青いたりすると、結構時間がかかるので、それが克生にとって時間の無駄になってしまうということです。しかも、実践の担当者は、普通、どの学生に答えてもらうか、アットランダムに当てることが多いため、ちょっとためらって、学生を選ぶときなど思いかげず、時間がかかってしまうことがよくあります。
- ②きちんとまとまった教案づくりが非常に大事です。質問を考えさせたり、練習問題を書いてもらったりする時間をあまり多く学生に与えると、学生は飽きてしまって、学習項目に対して興味を失ってしまう恐れがあります。たとえば、「下線をつけた言葉を漢字に改めた上でその類義語を書く」という練習問題を例に挙げると、これはかなり難しい問題なので、授業中にやる教室活動に向いていない。学生は時間をかけて一生懸命に頭をひねっても答えにくいので、「むずかしすぎるよ、もういいや」とあきらめる気持ちが出ると、この練習問題は、あまり効果が期待できなくなります。むしろ、ひとつの学習項目を段階的に簡単にいくつかの部分に分けて教えるほうがもっと効果的ではないでしょうか。
- ③非漢字圏の学習者を十分に配慮するべきです。われわれ漢字圏の学習者にとって、あたりまえにわかることでも非漢字圏の学習者、特に欧米系の学習者にとってそんなに容易なことではないからです。教えなくてもわかるはずだよとつい思ってしまうことをなるべく避けて、両者向けの教える方法を考慮に入れる必要があります。たとえば、四字熟語の実践授業で、実践の担当者が、一喜一憂と一石二鳥の意味をうまく導入したことはかなり印象深いことです。一喜一憂を巧みにパレンティンデーに関連させたり、英語の同じ意味のことわざを借りて、一石二鳥を説明したりしたことは機知に富

んで、すべての学習者に新鮮な感じを与えたと思います。逆に、前に述べたように、<下線をつけた青葉を漢字に改めた上でその類義語（対義語）を書く>といった漢字の性格が強い練習間額の中に、「雅趣、野趣」のような言葉は一級、二親の範囲内にはあるが、漢字圏の学習者にとっても答えを出すのにかなり難しいことです。まして非漢字圏の学習者にとって至難の技といっても過言ではないと私は考えます。

- ④補助教材の一環として、学習プリントは絶対必要なものとしみじみ感じました。最初に、一旦補助教材を配ったら、学生は授業中、プリントばかりを見て、あまり授業の内容に集中しなくなってしまうと心配していました。しかし、実際にプリントなしでやってみると、学生が受身になりすぎて、ときどき、私から一方的に出した学習項目に戸惑ってしまったことを私は察しました。むしろ、学習プリントを配布したほうが、学習者はまず目を通した上でもっと落ち着いて勉強の内容に集中できるのではないかと考えました。
- ⑤発音の授業ではなくても実践担当者は授業をしたり、学生に答えてもらったりするとき、発音のことを無視してはいけません。もちろん一々学生に読んでもらって発音を直す時間はありません。だが、新しい単語を紹介する際に、教える側は意味を確認した上で、正しく発音したあとで、学生に発音させ、間違いがあれば、すぐその場で直すと、より効果的でしょう。私自身はかなり発音とアクセントにこだわりがありますので、これから、どのように、学生とのインターアクションの時間をうまく生かして、学生の発音の能力を上げるかを重要なポイントにしていきたいと思っています。
- ⑥教師である以上、教師としての貫禄が必要です。まず、声の調子を高くし、声の通りをよくしないとだめです。次は、板書をきれいに、はっきり、きちんと、書かなければなりません。教師はある意味で、伝える役割を果たしているため、学生にはっきり、きれいに見えたり聞こえたりしないと、どんなにすばらしい内容であっても学生の興味を引き寄せることはできません。最後に、丁寧で、親切な態度をとるのも大切なポイントです。教師であっても、決して王様のように、学生に威張ってはいけません。あくまでも、教える側と習う側は平等な立場にあります。

以上のように、私は自分の感想を簡単にまとめてみました。この授業を通して初めて、教師の角度から自分が今までずっと学生をしてきた経験に加えて、いかに学生にわかりやすく、楽しく学んでもらえるかと、学生のことを真剣に考えるようになって大変いい勉強になりました。これから、ここで得た心構えを生かして、もっと多くの教育経験を積み重ねていきたいと思っています。

(リ トウナ・修士課程1年)